

一人一人に必要な力を育む自立活動

～自己理解を深める「お助けBook」作りを通して～

秋田県湯沢市立稲川小学校 教諭 榊田 久美

I 実践に当たって

本稿は前任校である湯沢市立山田小学校難聴学級（令和3年度全校児童数93名、通常学級6・特別支援学級2）での令和2年度・3年度の実践である。学級の在籍児童は男子1名で、私は令和元年度の4年生の時から3年間担任を務めた。児童は感音性難聴で人工内耳を装着しており、日常生活ではRoger（デジタルワイヤレス補聴援助システム）を使用していた。さまざまなことに興味をもち学習への意欲が高く、休み時間は交流学級の友達と元気に外遊びなどを楽しんでいた。だが、聞こえの困難さもあって意思疎通に困難を感じる場面や不安が大きくなり元気をなくす場面もあった。

そこで、4年生では自分に自信をもち、コミュニケーションの力を伸ばすことを自立活動の目標とした。児童の好きな活動（調理）を共に楽しみ、作った料理のレシピ集を友達や先生方にプレゼントすることは目標達成だけではなく、他者との信頼をも構築することができた。

5年生になった時に、中学校進学も視野に入れて自分自身を理解する学習の準備を進めていたところ、児童にとって大きく、困った出来事が二つ起きた。この二つの出来事は学校生活だけではなく、以後の社会生活をおくる上での大きな意味をもつものであった。私はその出来事への対処や解決の方法は、担任が教えるのではなく、自らが向き合い、問題の壁を乗り越えていくことが必要ではないかと考えた。そこで5年生の自立活動では、その問題に向き合う学習を「お助けBook」という本を作る活動を通して実践した。そして6年生では、進路選択の悩みに直面した児童が自信と意欲をもって進学できることを目指して「お助けBookを作ろう～中学校生活編～」の学習に取り組んだ。

この2年間の実践を報告したい。

II 実践内容

I 困った出来事を糧にして（5年生での実践）

単元名「こんな時どうする？～自分にもまわりの人達にも役立つお助けBookを作ろう～」

（1）単元設定の経緯

大きな出来事の一つは、地震を想定した休み時間の避難訓練の時、その児童が吐嗟にトイレの個室に避難したということだった。ちょうどそばにいた友達に「トイレはだめだ。こっちだ。」と呼ばれ、一緒に安全な場所に避難できた。もしそのままトイレに一人でいたなら、逃げ場のない空間で、誰にも気付かれず孤立したままだったかもしれない。

もう一つは「周囲の友達が自分の悪口を言っているような気がする」という気持ちがかんざんとなり、悲しみと孤独感にさいなまされたという出来事である。新型コロナウイルス感染予防のためにマスク着用の日々が続く、友達の表情も口元もよく見えず、目元だけで気持ちを推し量らなければならないという生活は、児童に耐えがたい孤独感を与えたと思われる。学校でも家に帰ってもその気持ちは続き、日常生活全般に影響をもたらした。

本単元の学習では、この二つの困難な場面について考えることに重点を置きつつ、普段使っている「Roger」についての説明や、学校と家庭の生活の紹介、興味をもち始めている手話の紹介等も

入れ、自己理解と周囲の子どもたちの、児童への理解をも進めるように「お助けBook」を編集することにした。また原稿の作成には児童が得意なパソコンを使って意欲の持続を図り、できあがった原稿はA4サイズのクリアファイルに1枚ずつはさんでいくことにした。パソコンの活用には、いつでも情報を追加できるという効果もあると考えた。本の形にして残すことにしたのは、日頃から書いて伝えたり、書いたものを後から見直して確認したりする学習方法が児童に有効であったことと、学習したことを積み上げて形に残すことで後から何度でも読み返せるよさがあると感じたからである。

(2) 単元の目標

- ・「お助けBook」作りを通して自己理解を深め、困ったときの解決方法を自分で考えることができる。【2心理的な安定(3)】
- ・まわりのみんなに分かりやすい表現で原稿に表すことができる。【6コミュニケーション(3)】
- ・友達や先生方との交流を通して、自分に自信をもって活動することができる。【3人間関係の形成(4)】

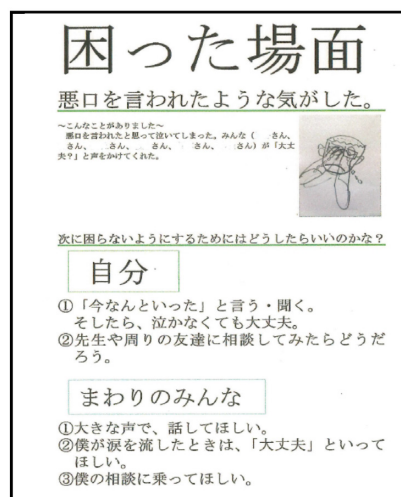
(3) 実践の様子

写真やイラストも入れながら読む人に分かりやすい構成や表現方法を工夫した。児童は自分の困難さについて考える機会を得て、困った時はどうするかを自分で考え、思いをまとめることができた。まとめた内容の一部を資料1に示す。

記述からは、困った時に周囲の友達にどうしてほしいかを具体的な姿で表現できていることがわかる。

(4) 実践を振り返って

うまくいかなかったことや辛かったことに向き合うことには苦しさも伴ったと思うが、強い気持ちで課題に向き合うことができた。また、本を受け取った交流学級の13人の子どもたちが、その内容を真剣に読んでくれたことはうれしいことであった。



資料1 く「お助けBook」の一部

2 自信をもち安心して進学するために(6年生での実践)

単元名「お助けBookを作ろう～中学校生活編～」

(1) 単元設定の経緯

中学校進学が間近に迫った時、通常学級に進むのか難聴学級に進むのか、児童の中で大きな迷いがあった。進路選択については児童自身が納得して決めることが大切と考え、時間をかけて解決していくこととした。本単元では、初めに中学校見学を行い、その後児童が信頼している卒業生の先輩に中学校生活についての疑問や質問を手紙で尋ね、そこから分かったことをまとめるという流れで学習に取り組むこととした。まとめ方については5年生で行った「お助けBook」の形をとり、「中学校生活編」として新たな1冊を作ることにした。

(2) 単元の目標

- ・「お助けBook」作りを通して自己理解を深め、進学について自信と意欲をもつことができる。【2心理的な安定(3)】
- ・文を書く活動により、正しい文法を身に付け、理解力や表現力を高める。【6コミュニケーション(3)】
- ・中学生との交流を通して、相手とやりとりする楽しさを味わうことができる。【3人間関係の形成(4)】

(3) 実践の様子

① 中学校見学

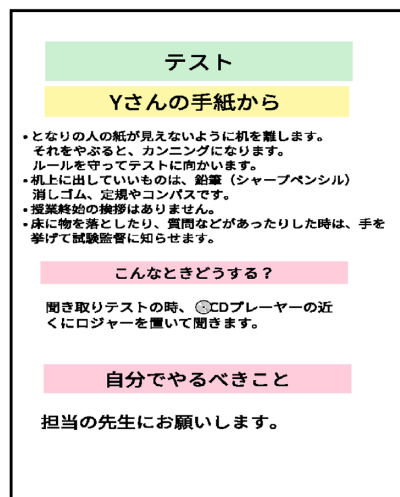
9月中旬に両親、児童、担任で進学先の中学校を訪問した。山田小学校の卒業生3名が落ち着いた態度で丁寧に説明しながら校舎内を案内してくれたことは、児童にとって大きな刺激になった。

② 先輩との手紙のやりとり

中学校見学後に、児童は「部活動」「腕時計」「テスト」「宿題」「学校の約束」「教科と教室」の6点について手紙で質問し、先輩方からは電子メールで写真入りの丁寧な返事が届いた。その内容をもとに「中学校生活編」作りをスタートさせた。

③ 原稿作り

六つの項目について「先輩の手紙から分かったこと」「こんなときどうする?」「自分でやるべきこと」の順に原稿をまとめていった。「テスト」のページでは、「聞き取りテストの時、CDプレイヤーの近くにロジャーを置いて聞きます。」と書いており、具体的な場面を想像して対処方法を考えたことに児童の成長を感じた(資料2)。



資料2 〈中学校生活編の一部〉

(4) 実践を振り返って

「お助けBook～中学校生活編～」作りを通して児童は中学校生活について理解を深め、頼もしい先輩方との交流が力となって、明るい見通しをもちながら納得して進路を決めることができた。進路選択については、秋田県立聴覚支援学校の先生にも有効なアドバイスをいただいた。通常学級と難聴学級のそれぞれに進んだ場合の生活について、比較しながら分かりやすく説明していただいたことは大変ありがたいことであった。

Ⅲ 成果と今後の課題

5年生の学習では、児童の身に起きた困った場面を単元の柱にすることで、困難な時に自分でできることと周囲の力を借りることについて具体的な姿を自ら考える力が付いた。6年生の学習では、中学校生活について先輩からの手紙を活用してまとめることで、進学に自信と意欲をもつことができた。いずれの学習でも、「お助けBook」作りを通して自己理解の深まりが見られ、人に聞いたり自分で考えたりするという経験を多く積むことで、内面の成長とコミュニケーションの力の高まりが見られた。

自立活動では、児童の現在の状態をよく見つめ、その先の目指す姿も考慮に入れながら課題を設定することと、どのような道筋で課題の解決を図っていくのかを工夫して実践することが大切である。そのためには一人一人に合った単元設定や学習方法を見つけ出し、児童が困難なことに向き合おうとする気持ちを支えながら指導や支援に当たる姿勢が必要であると考えている。児童と担任が信頼関係を紡ぎ、担任はいつでも児童を支え、守る存在であると示すことが、困難を恐れずに前へ進む力になると信じている。

自立活動の学びで得た力が、児童のこれからの生活を支えてくれることを願っている。